

琉球大学学術リポジトリ

「旅の手帖から」と「章魚木」： 中島敦の「南洋もの」新資料紹介

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2377

「旅の手帖から」と「章魚木」

——中島敦の「南洋もの」新資料紹介

仲 程 昌 徳

郡司勝義は、「環礁」について、

「環礁」と総題された「寂しい島」「夾竹桃の家の女」「ナポレオン」「真昼」「マリヤン」「風物抄」の六編は、単行本『南島譚』に収められて、初めて発表された。

と述べ、またその執筆時期について、

執筆時期は「南島譚」よりあとと推定されるわけであるが、「風物抄」の草稿は「斗南先生」の原稿を裏返して用ゐられてをり、また「虎狩」の原稿を裏返しにしてこの作品のメモに使はれてゐる。「斗南先生」「虎刈」はいづれも単行本『光と風と夢』に用ゐられた原稿であるから、それが不要となつた同書刊行の七月以降に、「環礁」が書き始められたことを物語るであらう。また単行本刊行にあつて出版社が、印刷にとりかかつたといふのが九月十一日であるから、この間に六編全部が出来上がつてゐたわけである。

と指摘していた。

「南島譚 環礁」の執筆時期に関しては、勝又浩もまた、昭和十七年八月三十一日付、『文学界』編集部庄野誠一宛ハガキ及び『文学界』五月号に発表された「光と風と夢」を中心とした作品集の刊行をめぐる経緯から「昭和十七年七月から八月にかけての頃と推測される」としていた。²

「南島譚」三編（「幸福」「夫婦」「雛」）及び「環礁」六編のうちの五編（「寂しい島」「夾竹桃の家の女」「ナポレ

オン「真昼」「マリアン」)についてはともかく、あとの一編「風物抄」の発表及び執筆時期については、少しく再考の余地がありそうである。

「風物抄」は、数字の下に島名を入れる形で、1クサイで始まり、2ヤルート、3ポナベ、4トラック、5ロタ、6サイバンでもって終わっている。それは、中島の昭和十六年九月二日付中島たか宛書簡に見られる、九月十五日バラオを発ってトラック、ポナベ、クサイ、ヤルートそしてサイバンを廻って十一月中旬或いは下旬バラオに戻ってくる日程になる第一回目の「長い旅」、そして昭和十六年十一月(六)九日消印中島たか宛書簡にみられる、十一月十八日バラオを出発して十二月二十七日に戻ってくる予定になっていた「第二の旅」を通じて得られた見聞をもとにして書かれたものであった。

中島は、第一回目の「長い旅」及び「第二の旅」の足跡を記した日記、また、その「旅」先の島々から出した中島たか宛書簡を数多く残しているが、「風物抄」と日記・書簡との関係について、

「風物抄」の1は、日記九月二十五日・書簡七六、2は日記九月二十七日、二十八日、二十九日・書簡七七、3は日記九月二十三日・書簡七一、4は日記十月十二日・書簡八二、5は日記十一月二十三日、二十四日書簡八七、6は日記十一月二十七日、二十八日。書簡九一に記されている体験をほとんどそのまま記したものである。との佐々木充の指摘があった。

「風物抄」は、旅中の見聞を記した日記及び旅先から出された妻宛書簡の六つの島々に関わる記述に手を加えたものである。佐々木の言葉に従えば日記、書簡に「記されている体験をほとんどそのまま記したものである」と言うことになるが、佐々木の検証が、中島の第二作品集『南島譚』以降の「風物抄」作品配列に添うものであることは、これまた言うまでもない。

「風物抄」六編の配列順は、『南島譚』に収録するにあたって考えられたものであった。というのは、『南島譚』以前に、「風物抄」と素材、編数を共にする小品からなる作品を発表していながら、それに従ってないからである。

○

中島は、『南島譚』以前に、「風物抄」の配列と少々異なるだけでなく、「風物抄」には採られてない題目になるものを含みながら、明らかに「風物抄」として纏められていくことになる小品群を発表していた。まず、それを紹介しておきたい。

ヤル ト

はじめは水平線上に横たはった一本の線。

やがて船が近づくとつれて、その線の上に木々や屋根が見分けられてくる。

トロリと白い脂を流したやうな朝風の海に浮かんだ、ヤルト環礁の最初の瞥見である。

ジャポールは小綺麗な島だ。砂の上に椰子とたこの木と家々とを程よくあしらった箱庭。

ヤルトはいい所ですねと言って、土地の人々に怪訝な顔をされた。ヤルトをいいなどと言ふ人は滅多にないさうだし、土地の人自身もいとは思つてゐないさうである。勿論、それは生活上の不便といふ点に就いていふのであらう。さういふ意味で、内地の小都會の場末然たるコロールやガラパンの生活が羨ましがられてゐ

るかも知れぬ。しかし、それにしても、私は妙な気がした。事変前に支那に遊んだ時も、私は之に似た経験をしたことがある。上海から蘇州に行つて数日を過ぎた時、上海の知人達が言つた。

「蘇州なんて来ない所だよ。画でも画くんでなかつたら何日もあつて仕方のない所さ。杭州ならばともかくも」さういふ在留邦人達にとつて最も理想的な場所とは、上海のフランス租界とか四馬路あたりの夜の盛り場らしいのである。私は蘇州へ行つて、そのうすぎたないといはれた街と堀割と石橋と塔とをめぐつて心からたんのうした。杭州のうすつべらな小綺麗さなどは問題にならない。まして、フランス租界の如き、言語道断である。

我々は支那を見るために支那に行き南洋を知るために南洋に来る。ヨーロッパを見出すために支那に行つたり、生活の内地の便宜さを樂しむために南洋に来たりはしないのである。

帽子

あまり上等でないバナマ帽をかぶつて私は歩く。道で出会ふ島民は誰一人頭を下げない。ヘルメットをかぶつたH君が道に行く。島民達は鞠躬如として道を譲り、恭しく頭を下げる。夏島でも秋島でも水曜島でも、何処でもみんなさうであつた。不思議な帽子である、このヘルメットといふ帽子は。

ジャポールを立つ前の日、M技師と私は土産物の島民の編物を漁るために低い島民の家々を―もつと正確にいへば、家々の縁の下を覗き歩いた。ヤル―トでは家々の縁の下にむしろを敷いて、そこに女どもがころ／＼してゐる。さういふ連中が多く編物をやつてゐるのである。M氏はより十歩ばかり先へ歩いてゐた私は、或る家の縁の下に一人の瘦せた女がバンドを編んでゐる所を見付けた。バンドは中々出来上りさうもないが、傍には

既に出来上つたバスケットが一つ置いてある。私は、案内役の島民少年にバスケットの値段を聞かせる。三円だといふ。もうすこし安くならないかと言はせたが、中々承知しきうもない。そこへM氏が現れた。M氏も少年に値段を聞かせる。女は、チラと私と見比べるやうにして、M氏を——いやM氏の帽子を、そのヘルメットを見上げる。「二円」と即座に女は答へる。オヤツと私は思った。女はまだ怯えたやうな態度でモゴ／＼口の中で何か言つてゐる。少年に通訳させると、「二円だけれど、何なら一円五十銭でもいい」と言つてゐるのださうだ。私が驚いてゐる中に、M氏はサツサと二円五十銭でそのバスケットを買上げて了ふ。

宿へ帰つてから、私はM氏の帽子を手を取つてしげ／＼と眺めた。相當に古い、既に形の歪んだ、所々にしみのついた、おまけに余りいい匂のしない何の変哲もないヘルメット帽である。しかし、私にはそれがアラデインのランプの如くに靈妙不可思議なものと思はれた。

クサイ

真夏にもたま／＼うすら寒い日があるやうに、南洋にも、時に温帯的な風景がある。

碇泊中の船から眺めたクサイの島はどう見てもゴーガンの画題ではない。細雨に烟る汀や、模糊として隠見する翠の山々などは、八大山人が大雅堂かとにかく確かに東洋の繪である。「一汀煙雨杏花寒」とか、「暮雲卷雨山娟娟」とか、そんな讚がついてゐても一向に不自然さを感じさせない、純然たる水墨的な風景である。

口タ

断崖の白い、水の豊かな、非常に蝶の多い島。静かな昼間、人のゐない官舎の裏に南瓜の蔓が伸び、その黄色

い花に、天鷲絨めいた濃紺色の蝶々どもが群がつてゐる。

島民の姿の見えないソソソンの夜の通は、内地の田舎町のやうな感じた。電燈の暗い床屋の店。何処からか聞えてくる浪花節の蓄音機。わびしげな活動小屋に、黒田誠忠録がかかつてゐる。切符売の女のやつれた顔。小舎の前にしやがんでトーキーの音だけ聞いてゐる男二人。幟が二本、海風にはためいてゐる。

タタツチヨ部落の入口、海から三十間と離れない所に、チャモロの墓地がある。十字架の群の中に一基の石碑が目につく。バルトロメス・庄司光延之墓と刻まれ、裏には昭和十四年没九才とあつた。日本人にして加特力教徒だつた者の子供なのであらう。周囲の十字架に掛けられた古い花輪どもは悉く褐色に枯れ凋み、海風にざはめく枯椰子の葉のそよぎも哀しい。眼に沁みるばかり鮮やかな海の青を見、古い嘆の唄を繰返す涛の音を聞きながら、私は何時かお能の「隅田川」を思ひ浮べてゐた。母なる狂女に呼ばれて、幼い死児の亡霊が塚の後からチヨコチヨコと白い姿を現はす。母がとらへようとすると、又フツと隠れて了ふ・・・

あとで公学校の教員補に聞くと、この子の両親は子供に死なれてから間もなく此の地を去つたといふことである。

サイパン

月が明るい。道が白い。何処やらで単調な蛇皮線の音がする。ブラ／＼と白い道を歩いて見た。バナナの大きな葉が風にそよいでゐる。合飲くみひのやうな葉が細い影をハッキリ道に落してゐる空地に繫がれた牛が、まだ草を喰つてゐるらしい。何か夢幻的なものが漂ひこの白い径が月光の下を何処迄も続いてゐるやうな気がする。ペコン／＼

といふ間ののびた蛇皮線の音は相変らず聞えるが、何処の家で鳴らしてあるのか一向に判らぬ。その中に、歩いてゐた細い径が、急に明るい通に出て了つた。出た角の所に劇場があつて、その中から頻りに蛇皮線の音が響いてくる（だが、これは先刻から私の聞いて来た音とは違ふ。私の道々聞いて来たのは劇場のそのやうな本式の賑かなのではなく、余り慣れない手が獨りでポツン／＼爪弾きしてゐたやうな音だつた。）私は、何といふことなしに小屋の中にはひつた。相当な入である。出しものは二つ。はじめのは標準語で演ぜられたので、筋は良く判つたが、極めて愚劣なくすぐり。第二番目のになると、今度は言葉がさつぱり分らない。私にはつきり聴きとれたのは「タシカニ」（此の言葉が一番確かに聞分けられた。）「昔カラコノカタ」「ヤマミチ」「トリシマリ」その他教語に過ぎぬ。かつて伊太利のシピオネなる映画を見たことがある。私は伊太利語を皆目知らないが、それでも四つ五つの単語を聴きわかることが出来た。私の知つてゐる極めて少数の羅旬語の幾つかが其の俣出て来たからである。史劇北山風雲録なるものは、言葉に関する限り、私にとつて伊太利映画と選ぶ所がなかつた。小舎を出てから、わざ／＼廻り道をして、チャモロ家屋の多い海岸通を歩いて帰つた。この路も亦白い。殆ど霜が下りたやうに白い。微風、月光、石造の家の前に印度素馨が白々と香り、その蔭にゆつたりと牛が一匹臥てゐる。牛の傍にイヤに大きな犬が臥てゐるなと思つてよく／＼見たら山羊であつた。

書物

シヨペンハウエルによれば、読書とは、自ら思索する勞を避けて、その代り他人の思索の跡を辿ることであり、独創的な人間の選ばざる所だといふ。この筆法で行くと、南洋は、実に独創性を養ふに適した環境だ。まるで書物が無い。書物を取寄せる便宜もない。私の如き非独創的な人間は誠に困却せざるを得ない。雑誌といふ雜

誌は何時も月遅ればかり。尤も之は不平をいふ方が無理なのだが、南洋へ来た当座は相当之に弱らせられた。雑誌といふものの性質上(學術雑誌は別として)これではまるで意味がないからである。しかし、妙なもので、そのうちに私は月遅れ雑誌の或る一種の読み方を覚えて来た。つまり、もうとつくにかたのついた事件に就いてのトンチンカンな予想を読んだり、後にひどい不評を受けて退陣を余儀なくされる人物に対する以前の滑稽な讃辞を見たりすることに意地の悪い一種の皮肉な満足を感じるやうになつたのである。

我々人間とは、何と、まあ、見通しのきかない、憐れむべき、滑稽な生物であるか！ 毀誉といひ褒貶といひ、何と、あてにならぬ手を翻すが如きものであるか！・・・

だが、斯うした氣障な犬儒的な傾向は、生来善良な人間にとつて、さう永続する訳がない。やはり普通の素直な読方がしたくなつて来る。一時、私は自分が東京から持つて来た少数の古典に嚙りついて、一切他を顧みまいとした。どうせ新しいものは読めないのだといふ諦がかうした瘦我慢になつたのである。しかし、之もやはり無理であつた。所詮はインソップの狐の「酸っぱい葡萄」にすぎないのである。それに第一、之では、日曜の調度品の代りに稀代の重宝ばかりを使つてゐるやうなもので、どうにも動きがとれない。プラトンと左伝との間に、たまには、新刊書の一つも読みたくなるのは、当然である。

だが、何としても南洋には本が来ないのである。月遅れ雑誌や吉屋信子先生、竹田敏彦先生の類は兎に角として全く、書物らしい書物は何一つ手にはひらない。斯う活字に飢ゑてくると、料理の本でも売薬の広告でも何でも読みたくなる。(料理の本だとて莫迦にはならぬ。少くとも吉屋信子先生の小説よりは、「お正月向献立」の方を私は採りたい。胃液の分泌を促すだけでも後者の方が遙かに健康な読物である)群島の文化の中心たるコロールの町に岩波文庫を扱つてゐる店が一軒も無いのである。それ故に、この十一月サイパンに行つて其処

の南貿の店先に四五十冊の岩波文庫を見付けた時は、一寸事の意外に驚いた位であつた。所が更に驚いたのは、その岩波文庫が何日も何日も店頭に曝されたまま、一向に減つて行かないことである。私は又考へなければならなかつた。一体、南洋には本が来ないから、人々は読書しないのであらうか？ それとも、てんで需要が無いから、南洋には本が来ないのであらうか？ そして又、その需要の無いといふのは、南洋に住む人々が、(此の文の冒頭に書いたシヨベンハウエルの所謂) 獨創性に富み過ぎてゐるからであらうか？と。

いや、こんな穿鑿はどうでもいい。いづれにせよ、書物飢饉といふ、動かし難い事實は依然として残る。当分は「無用の読書によつて損はれざる獨創性」の為に万歳を唱へるよりほかに、途は無ささうである。

「ヤルト」 「帽子」 「クサイ」 「ロタ」 「サイパン」 「書物」 の六つの短章は、「旅の手帖から」として昭和十七年二月一日発行になる『南洋群島』第八巻第二号に発表されたものである。

「旅の手帖から」が、中島敦の作品であることはその一編「サイパン」が、日記十一月二十七日、書簡十一月二十九日消印中島たか宛と重なるものであることからでも明らかであるが、さらにあと一つ、決定的な証拠がある。

それを、次に紹介しておきたい。

章魚木

バラオ本島の北、アコールからマガランへと出る緒土の丘陵で、数多くのたこの木を私は見た。本島も此処迄来ると、もう大分幅が狭く、丘の背を歩む私達には東にも西にも海の眺望が展ける。最早頭上を蔽ふたまなやうかるの茂みも無い。山麓の密林地帯を抜けて灌木地帯に出た時のやうな、カラリとした感しであつた。

濃紺、紫藍、翡翠、淡緑と鮮かにだんだん染にされたリーフの色、底抜けに明るい空。烈しい陽を照返す赭土の丘。そして、其の赤い小山にも、海への傾斜にも、到る所ただこの木、たこの木、たこの木であった。振れ、瘤立ち、何かとほけた感じの幹に、バサ／＼の大きな葉がどうにかくつついてゐて、それが飄々と風に揺れ、さうして其の中に、案外殊勝らしく、大きな固い実を大事さうに抱いてゐる。潮風に吹き撓められたその一本々々が皆それ／＼に一癖ありげに見えるのである。或るものは傲然と屹立して亡び行く民族の最後の酋長の如き氣概を示し、他のものは飄然と世を逃れ道を楽しむ者の如き風格を見せる。吼えるもの。嘯くもの。晒ふもの。嘲るもの。沈鬱なるもの。忿然たるもの。悄然たるもの。一本々々が悉く他と異つた表情をして、空と海と風との間に立つてゐる。根上りの仕方にしてからが、又実に千差万別で、イヤに力み返つて四股を踏んでゐる様に見えるものがあるかと思へば、或ひは又、床下の男之助のやうに今舞台へせり上つて来たかと思はれる程ノホンとしたのもある。道端に見受けた矮小な一本の如き、長く枯れ裂けたほさ／＼の葉が短い幹をすつかり蔽ひ、それが海風にさは／＼と鳴つて、何といふ種類の犬か知らないが良く見受ける、むやみに毛が長く垂れて目もつぶれるばかりに見える、あの犬の一匹のやうに私には見えた。それも、その犬が人にも踏みつけられて惨めな悲鳴をあげてゐる時のやうな印象を受けたものである。

マガランに着いた夕方、食事を済ませてから、私達はコンレイの方へと丘の上の一本松を散歩に出かけた。ここにも又、海の眺望とたこの木の群立とがあつた。既に蒼茫と暮れかかつた坂道の両側に、葉をおどろと振り乱したたこの木どもが、モモンガアとでも言ひたげに私達を威すが如き風情であつた。生臭坊主のやうな狡さうな奴や、寒山拾得みたいな飄逸な奴や、今にもアカンベエをして見せさうな奴や、後を向いて舌でも出しかねない奴や、さうした無数のたこの木どもが各々いたづら気な顔付で、下を通る我々を見守り、もし此方が

一寸転びでもしたら一度にワツと噓し立てさうに思はれた。凡そ没個性的な椰子の樹にひきかへて、この木といふ奴はどれを見ても全く一本一本に個性が躍動してゐるやうだ。

バラオなるアルコロン路の赤山の許多たこの木忘らえぬかも

海へ崩ゆる赤ら傾斜にたこの木が根上りて立つ立ちのゆゆしも

幹は振れ葉は裂けたれどたこの木も実を持てりけりあはれたこの実

たこの木がたこの実抱くとをのがじしたこの木さびて立てるをかしさ

夕坂を海に向ひてたこの木が何やら嗤ひ合唱へる如し

たこの木がたこの木毎に顔扮り夕べの坂に我を感すはや

たこの木はたこの木らしき面をして夕べの風に吹かれてゐるも

数日後、アイミリーキから瑞穂村への道で私は又たこの木の群を見た。しかし、これは幹もすくすくと伸び葉も折れず裂けず、極めて大人しい個性の無いたこの木共であった。アルコロンのたこの木は突然一喝をも喰はせかねない勢だつたが、此処のたこの木達は、声を揃へて大人しくコンニチハと頭を下げさうな、良くしつけられた優等生ばかりである。飼慣らされた檻の中の猛獣を見る時のやうな味気無さを私は感じた。

○ 「章魚木」は、昭和十七年三月一日発行『南洋群島』第八卷第三号に発表されたものである。この文章は、先の

「旅の手帖から」の「書物」と同じく全集等に収録されることなく、これまで埋もれていたのではないかと思われるものであるが、これらが間違いなく中島の作品であることは、「章魚木」にみられる短歌から明らかであろう。

七首の短歌は、他でもなく、最後の日記昭和十七年、二月二十一日に収録されている二十首の中の、次の八首（の中の七首）と重なるものである。

パラオなるアルコロン路の赤山の許多章魚の木忘れぬかも

海へ崩ゆる赤ら傾斜に章魚の木が根上りて立つ立ちのゆゝしも

〔禿山の「バン」たこの木どもがをのがじしたこの実持ちて立てるをかしさ〕

夕坂を海に向ひてたこの木が何やら囁ひ合唱へる如し

幹は振れ葉は裂けたれどたこの木も実を持ちりけりあはれたこの木

たこの木がたこの木毎に顔扮り、夕べの坂に我を感ずはや

たこの木はたこの木らしき面をして夕べの「顔」風に吹かれてゐるも

葉は風に枯れ裂けたれど、たこの木も、実をもてりけり、あはれたこの実

たこの木がたこの「木」み抱くとをのがじし、たこの木さびて立てるをかしさ

「旅の手帖から」が、日記・書簡及び「章魚木」の中に見られる短歌等からして、中島の作品であることは間違いないし、更にはそれが「風物抄」として発表されていく小品群と関わりの深いものであることも疑いようがない。

勝又は「南島譚 環礁」の解題で、「南島譚 環礁」は「作品集『南島譚』に初出。原稿段階では「遠い島の話」

と総題されているが、単行本に収めるに当たって改められたと思われる」と書いていたが、総題だけでなく、作品もまた、『南島譚』収録に当たって書き改められていたのである。とりわけ「原稿段階では「遠い島の話」と総題されて」いた「南島譚 環礁」は、すべて「草稿」が残っていて、何度か書き改められていたことがわかっているが、「風物抄」に関して言えば、「草稿」以前に、「旅の手帖から」と題して発表された「初出」稿とも言えるのがあったのである。

では何故、これまで「旅の手帖から」や「章魚木」が見逃されてきたのであろうか。

それは、一つには中島の「南洋もの」が、他の諸作に比べ、それほど注目度が高くなかったといった事情があったからであろう。また、「南洋もの」に関心を寄せたにしても、南洋で刊行されていた雑誌までは目がいかなかったということがあろうし、たとえ『南洋群島』のような雑誌があったことはわかっているが、揃いで何処でも見ることできるような雑誌ではなかったということがあろう。二つには、中島をその雑誌に紹介したと思われる土方久功が、そのことに関して何一つ語っていないことがあろう。そして三つめには、「旅の手帖から」「章魚木」の筆者名が、中島敦ではなく三好四郎になっていたということがある。

中島が、『南洋群島』に作品を発表するにあたって三好四郎を用いたのには、いかなる理由があったのであろうか。

三好四郎が、れっきとした中島の親友であったことは、中島の「手帳」、昭和十一年の住所録に「鎌倉町浄明寺 五四五 三好四郎」とあるところからもわかるし、同年八月十七日の項に「午後四時三好（白山丸）ヲ迎へ二行ク」をはじめ、昭和十六年六月二十八日、中島が南洋に出發するのを見送った人たちの名前の中に見られることからわかる。また、三好は、単なる親友であっただけでなく、「ある意味では著者中島の文学が今日あることにとっ

て、缺かすことの出来ない案内役である」といわれるような人物であった。

中島が、なぜそのように大切な人の名前を筆名に使ったか明らかでない。日本から遠く離れた南洋の小さな島で発刊されている雑誌を、東京で手にするものなどいるはずはないという思いが中島にあったのだろうか。それとも、三好への友愛を示すための借用だったのだろうか。何れにせよ、「風物抄」の初期稿ともいえる「旅の手帖から」や「章魚木」が、これまで捨て置かれてきたのは、その雑誌やさらには筆名が災いしていたということがある。

南洋にいて、南洋で刊行されていた雑誌に親友の名前を用いて発表された作品。それらの作品は、発表された時期が時期だけに、「影がうすい」ものであったとしかいいようがないが、そのことが、逆に大きな意味を持つことにもなっているはずなのである。「敦がまだサイパンにいた十二月八日。ついに日本はアメリカに宣戦布告し、太平洋戦争へと突入した。この開戦を機に、米領グアム島を至近距離に持つ南洋群島の空気は一変する。この日から嚴重な灯火管制が敷かれ、青年団は監視に駆り出され、コロールをはじめ、町の様子はどこもものしくなった。南洋群島では、すでに生活物資、とくに食料品が窮乏して、官舎の食堂では、すいとんや芋粥のようなものしか出なくなっていた」ような時期、一方では「今や群島の地位こそ最も重大な役割を持つに到った事は誰れもが承知の事である。我々在住民は真に協力一致この事態を迎へ、沈着、敏速、且つ適切なる行動を取らねばならない。而して戦争が如何に長期になるも、光榮ある皇國の爲め、決死奉公、南進大和民族の実を挙げ、群島を死守すべきである」といった文字が踊りはじめたときに「旅の手帖から」「章魚木」は、書かれ、発表されていたのである。中島は、十二月八日の日記を「午前七時半タロホホ行のつもりにて支庁に行き始めて日米開戦のことを知る」と

始め、

朝床の中にて爆音を聞きしは、グワムに向いしものなるべし。小田電気にて、其後のニュースを聞く。向い

なる陸戦隊本部は既に出動を開始、門前に、少女二人、新聞包の慰問品を持来れるあり。須臾にして、人員、道具類の搬出を終り、公会堂はカラになりしもの如し。腕章をつけし新聞記者二人、号外を刷りて持来る。ラジオの前に人々蝟集、正午前のニュースによれば、すでに、シンガポール、ハワイ、ホンコン等への爆撃も行えるものの如し。宣戦の大詔、首相の演説等を聞いて帰る。午後、島木健作の満州紀行を読む、面白し。蓋し、彼は現代の良心なるか。とこ屋に行く。ゲートルをつけ警防団のいでたちをなせる親方に頭髪を刈って貰う。青年団、消防団等の行進、モンペ姿の女等。夜の街は、すでに警戒管制に入れることとて、まっくら。

と書いている。

「旅の手帖から」六編が発表されたのは、『南洋群島』昭和十七年二月号。「章魚木」が発表されたのは翌三月号。「旅の手帖から」の中の一編「サイパン」は、昭和十六年十一月二十七日、二十八日の日記を踏まえて書かれていた。「章魚木」は、昭和十七年一月二十三日、二十四日の日記を踏まえていた。⁹『南洋群島』二月号は、一月二十七日印刷、二月一日発行、三月号は、二月二十七日印刷、三月一日発行となっている。¹⁰それらの奥付を信用するとすれば、「旅の手帖から」は、昭和十六年十一月二十八日から昭和十七年一月二十七日迄の間に、「章魚木」は、昭和十七年一月二十四日から二月二十七日の間に書かれていたということになる。

「風物抄」へと組成されていく「旅の手帖から」が、「日米開戦」時と時を接して書かれていたことはまず間違いないが、中島は、十一月（六）九日消印中島たか宛書簡に「身体は元気になったが、この暑さ、むし暑さでは、頭を働かせることは、殆ど不可能といってもいい。夜だつて、とても、書きものなんか出来ない。実は、この十月一パイ迄に、オレは或る仕事をするつもりだったんだが（内地を出発する時も、そのつもりで、原稿用紙などを持って来たんだが）、はじめの七月・八月は病氣ばかり、それから旅行となり、旅行に出る時もまだあきらめられな

いで、原稿用紙を持って行ったのだが、事實は一枚も書けなかった。暑さのせいにするのは卑怯かも知れないが、実際、この気温ではオレには何一つ、仕事が出来ない」と書き、また十二月二日消印、中島たか宛書簡でも「釘本からも手紙が来て、何か、書くように言ってきたが、こちらは書くどころの騒ぎじゃない。サイパンへ来て、多少涼しい風が吹くので、少し本でも読んで見たい気が起った位のところだ。原稿を書くなんて、何処か、よその世界の話のような気がする。そういう意味の返事を釘本に出してやったよ」と書いていた。中島のそのような妻宛書簡を踏まえ、濱川勝彦は「島々を巡っている時、十二月八日の太平洋戦争勃発に遭遇する。一方、持ち歩いた原稿用紙は一枚も書かれなかった」と書いていた。

中島が、いつ「旅の手帖から」を書き出したのか、そしてそれらを『南洋群島』に発表したのはどのような経緯によるのかよくわからない。が、少なくとも、「原稿を書くなんて、何処か、よその世界の話のような気がする」といついていたところから立ち直り、南洋において、南洋の島々と関わりのあることを、太平洋戦争勃発と時を同じくして書き出していたのは確かである。

注

(1) 編集委員中村光夫、氷上英廣、編集・校訂郡司勝義『中島敦全集第一巻』「解題・校異」の「解題」、「環礁」の項、筑摩書房、昭和六十年初版第十三刷。

(2) 『中島敦全集2』解題、ちくま文庫、筑摩書房、一九九三年第一刷。

(3) 第一回目の旅行は、次の通り。

九月十五日出発、九月十九日八時半、夏島上陸。九月二十日、午後三時出帆。九月二十二日、未明ポナペ入

港。二十三日、未明出帆。二十五日、未明クサイ着。三時半出帆。二十七日、ジャポール五時入港。三十日三時出帆。十月二日、四時クサイ入港、八時半出帆。三日、午後、ポナベ入港。四日、四時半出帆。六日、朝五時過トラック夏島入港。八日、八時出航、冬島。九日八時半出発、夏島着。十日、九時過秋島着。十一日、一時夏島帰着。二十六日、七時過出発、十二時水曜島着。二十七日、九時乗船、十一時過、月曜島着。二十九日、十時乗船、十二時過夏島着。十一月五日、六時十五分頃滑走開始、離水。二時二十分着水、三時前帰宅。第二回目の旅行は次の通り、

十一月十七日、四時出帆。十九日、朝七時ヤップ入港。十時過帰船。二十一日、午後六時ロタ入港。二十四日、四時半乗船。二十五日、十時テニアン発、十二時サイパン着。十二月十日、午後四時乗船。十一日、十一時過、テニアン着、三時四十分帰船。十二日、未明出帆。十四日、バラオ着、十二時投錨、一時半下船。

(4) 『中島敦』桜楓社、昭和四十六年。「風物抄」の最後「サイパン」の項を佐々木は「6は日記十一月二十七日、二十八日・書簡九一」としているが、郡司勝義編集・校訂になる『中島敦全集第三巻』所収「書簡」では「四六」（十一月二十九日）が6と関係し、ちくま文庫版『中島敦全集2』所収書簡では、「160」（十一月二十九日）が6と関係のある記述になっている。

(5) 佐々木充は「『南島譚』三編——光と闇——」（『中島敦の文学』昭和四十八年六月、桜楓社）で、「作品集『南島譚』は、（中略）昭和十七年十一月十五日発行された。収録作品は次のようである」として、目次をうつしている。それを見ると、「南島譚」三編（幸福、夫婦、鶏）、「環礁—ミクロネシヤ巡島記抄—」五編（寂しい島、夾竹桃の家の女、ナポレオン、真昼、マリアン）のあとに「風物抄」として、1クサイ 2ヤルト 3ポナベ 4トラック 5ロタ 6サイパンとある。

(6) 原文の紹介に当たっては、旧字体を新字体に改めたが、旧かな遣いは、本文のままにした。

(7) 「ヤルト」は、日記昭和十六年九月二十七日、書簡十月一日、「クサイ」は日記九月二十五日、書簡なし、「ロタ」は日記十一月二十三日、二十四日、書簡十一月二十五日、「サイパン」は日記十一月二十七日、書簡十一月二十九日を踏まえている。「帽子」「書物」は、日記にも書簡にも関連する記述が見られない。「帽子」は、「風物抄」では「2ヤルト」の中に取り込まれている。

「旅の手帖から」と「風物抄」との間には、多くの異動が見られる。その件に関する考察は、別に稿を改める必要があるが、そのなかでもとりわけ「サイパン」は、微妙な問題を含んでいる。「旅の手帖から」の「サイパン」には、「単調な蛇皮線の音」とあるのが「風物抄」の中の「サイパン」には、「単調な琉球蛇皮線」というように「琉球」が添えられ、また前者にはない「此処は沖縄県人ばかりの爲の——従って、芝居は凡て琉球の言葉で演ぜられる——劇場である」といった箇所、さらには「曾てパラオ本島を十日ばかり徒歩旅行した時、途を聞く相手が皆沖縄県出の農家の人ばかりで、全然言葉が通じないで閉口したことを憶い出した」といった箇所が後者には書き加えられているが、そこに明らかのように、後者では「沖繩」「琉球」と書き添えられていくのが、なぜ前者では明記されることがなかったのか、一考に値するはずである。

(8) 『南洋群島』昭和十七年二月号(第八卷第二号)、三月号(第八卷第三号)とも台湾中央図書館分館蔵。齋藤勝『中島敦書誌』(近代文学書誌大系4、和泉書院、一九九七年六月)の「著作(一)雑誌・(新聞)」の項にも、『南洋群島』の誌名は見られない。

(9) 引用は、ちくま文庫『中島敦全集』による。本稿における中島の文章の引用は、ちくま文庫版『全集』を使用した。

(10) ちくま文庫版『中島敦全集2』所収。

(11) 中村光夫、水上英廣、郡司勝義編集『中島敦全集 第二巻』所収「草稿2」。「風物抄(草稿)」の「解説」(郡司

勝義)に、「1」は、これまでと同じ原稿用紙で五枚分、さらに第一枚目と第五枚目の裏に計二枚分の追加が書かれた草稿である。／この「1」が、「草稿」とはいふものの、完成した作品との差はあまりないのに反して、「3」と「4」にあたる部分は、段階からいって、「草稿」の前の「覚え書」または「下書き」に位するものである。これは「斗南先生」の原稿の36、35、34、33、32、31、30を裏返しにして書かれてゐる。／また「斗南先生の原稿6の裏には、同じく「風物抄」5の、第一巻本文頁で第427頁第一行目から第六行目に当る部分が書かれ、「虎狩」の原稿9には「風物抄」4の冒頭に当る部分が書かれてゐる。」とある。

(12) 小沢秋広は『中島敦と問い』（河出書房新社、一九九五年六月、初版）で、中島の南方滞在に関して、「一般に、この南方滞りが敦の文学に重要だったとは考えられていない」こと、また「生活上の大きなエピソードであっても、敦の文学にとっては本質的ではないかのように」見られていると書いた上で、『弟子』『李陵』等の作品と「南島譚」「環礁」に収録されている作品群とを比べてみると、「スタイルが違う以上に、随分と影がうすい。極端に言えば、敦の文学から「南島譚」と「環礁」の作品群を消し去っても大きな違いはない」と考えていた、と書いていた。小沢は、しかし「南島譚」「環礁」に収められた作品に、「大切なものがある」ことについて触れていたのであるが、一般的に、それらの作品は「随分と影がうすい」だけでなく、ほとんど論じられることがなく、打ち捨てられていたといえるであろう。

氷上英廣は「中島敦、人と文学」（前掲書8）で、「私は中島の書いた南洋もの、『環礁』その他の短編をきわめて愛する」といい、「『環礁』には、作者のみずみずしく鮮烈な感覚と素直な思念がひとりだちで呼吸している」といい、「『環礁』では中島敦は自分の眼で見、自分の耳で聞いた材料によって、じかに自分の歌を歌っています。南方の原色的な自然のいぶきに打たれ、その強い陽光にさらされて、自分の頭で思念しています。ここにあるのは生地

のままの中島敦であります。過不及のない中島敦であります」と書いてあるが、「南洋もの」について水上のように論じたのはそれほどいいといえるであろう。

中島の「南洋もの」について論じたのは、浦田義和の「ミクロネシアと中島敦」「中島敦と土方久功」（『近代文学と八南』）一九九二年十月刊所収等がある。中島の南洋行が、中島の作品にどのような変化をもたらしたかについては、小澤保博の「中島敦の南洋行（上）」（『琉球大学教育学部紀要 第27集第一部』昭和59年1月、未刊？）等がある。

(13) 『南洋群島』の所蔵が確認できるのは台湾中央図書館分館の他に、国内ではわずかに慶応、一橋等の大学図書館であるが、何れの図書館にも揃いがあるわけではない。

(14) 『南洋群島』は、土方が作品、論考等を精力的に発表した雑誌である。中島が、南洋滞在中、生活全般に渡って土方に面倒をみてもらったのは中島の日記、書簡に見られる通りである。またそのことは「南洋では土方先生に肉親も及ばぬ御親切を戴いたと、申しました」（中島たか「お礼にかへて」前掲書8と同）との一言によく表れている。

(15) 前出、筑摩書房版『中島敦全集 第三巻』所収。

(16) 郡司勝義「解題」『中島敦全集第三巻』、昭和六十年、初版第八刷。中島と三好の交友については、釘本久春「敦のこと」（中村光夫、水上英廣、郡司勝義編『中島敦研究』所収、筑摩書房、昭和五十三年十二月第一刷）にくわしい。

(17) 岡谷公二『南海漂泊 土方久功伝』河出書房新社、一九九〇年八月初版。

(18) 「我等在住民の覚悟」『南洋群島』昭和十七年一月一日、第八巻第一号。

(19) 昭和十七年一月十七日、中島は、土方久功を誘って三度めの旅に出発。十八、十九日マルキョク、二十日オギワル、二十一、二十二日ウリマン、二十三日マガンラン、二十四日カヤンガル、二十五、二十六日アイミリーキ、二十七日

ガスパン、二十八、二十九日林業試験所、三十日ガトキップと、パラオ本島・バベルダオブ島をまわっている。

(20) 印刷年は、二、三月号ともに昭和十六年となっているが、昭和十七年の間違いである。

(21) 濱川勝彦「中島敦の人と作品」(濱川勝彦編『鑑賞日本現代文学17 梶井基次郎・中島敦』平成元年7月、三版、角川書店)。鷺只雄も「中島敦——そのエスキス」(『中島敦論狼疾の方法』有精堂、一九九〇年五月)で、「昭和十六年六月末に南洋庁赴任のためパラオに向けて出発、約八ヶ月滞在し、翌年三月に帰国するが南洋では気候と病気のため一行も書けず」と書いていた。